まで高圧電線を張り替る必要があつたので、運転を開始したのは昭和二十一年の夏であつた。

年間ひきつぶし三万五千石を目標としているが、原木は幾寅営林署から供給をうけ、年間四万石造材しているが、国有林の林力増強計画によると、林力増強のため木を植える必要上、不良木を皆伐して、そのあとに早く育つ品種のよい木を植林する時代となつているので、千葉木材ではこの造林も年間約百町歩している。

工場長は千葉茂で、製材は道内では旭川市附近、帯広市附近、札幌市附近、内地では千葉木材東京出張所を通じて、東京、名古屋、大阪、広島、福岡県大川町の家具工場に向けている。

第四節　野口木工場

国策パルプ専属請負業者として野口木材部が金山に造材事業を初めたのは、昭和二十一年であつた。その後金山、幾寅両営林署の担当区域内で年間二万石の造材をやつていたが、二十二年から移動製材機で鹿越で営業を初め、二十七年には幾寅で四十二吋手押機で準備、二十八年十月現在地に木工場を建設し、四十八吋本機を増加して基礎確立したのである。

原木は営林署から払下をうけ、農村の住宅、納屋、市街地の新築家屋等に供給している外遠く札幌、小樽にもおくられている。

第五節　伊藤組木材株式会社
落合木工場

落合における木工場の元祖は福岡隆瑞と藤原長次郎の共同経営による工場であるというが、禅宗の僧であつた福岡隆瑞は学校と寺院と木工場の三つの面に於て落合を開いたことになるのである。約三年の経営で施設を美瑛に移したのであつた。年代は正確には判らないが、明治の末期であつた。これは伊藤組木工場の前身と言つてもよい。

伊藤組木材株式会社が創立されたのは明治二十六年四月二十七日で、法人設立は昭和二十二年四月二十八日である。

取締役社長は伊藤義郎、資本金二〇、〇〇〇千円（授権資本金五〇、〇〇〇千円）木材業及製材業を営むものである。

明治二十六年四月、伊藤亀太郎が札幌に於て土木建築請負業伊藤組を創業、製材と木材業に鉄工業を併営し、

事業の進展にともなつて遂次各地に事業所を設置して来たのである。

昭和十九年六月、伊藤豊次が組長に就任し、事業の膨脹にしたがつて昭和二十一年に工事部門を、昭和二十二年に木材部門および鉄工部門を、昭和二十九年に農林部門をそれぞれ法人組織にした。

昭和三十一年三月一日、伊藤豊次が会長となり取締役社長に伊藤義郎が就任して今日に及んでいる。

本社は札幌、工場は明治四十二年八月二十一日札幌工場、大正三年十二月十六日置戸工場、昭和七年十二月一日釧路出張所、大正十年五月一日函館販売所、昭和二十一年三月一日小樽販売所が設けられたのである。

取締役会長伊藤豊次、取締役社長伊藤義郎、専務取締役藤田重清、常務取締役高島孝喜、広瀬芳一、取締役村田広吉、杉山宗十、監査役鈴村太郎吉、田中正静の諸氏である。

落合木工場は明治四十四年七月八日の設立であつて、空知川上流における最古の歴史と、最大の業績をもつている。

落合駅から狩勝に向つて汽車が構内を発車したとき、左に太い煙突が立ち、底力のあるリズムとともに蒸気をふきあげているこの工場は、事務所前から渡月橋によつて社宅街をむすぶ地形と、鉄道と空知川の間を埋める土場の木材風景と共に、落合に生れ、落合に育つた人々の郷愁をそそるのである。

落合から木材を取去つたら、果して何が残るのだろうか、木材の集散の心臓として古い歴史のあるこの工場は明治、大正、昭和の三代にわたつて狩勝峠の麓に蒸気をあげているのである。

敷地坪数二、四三五坪、工場坪数二〇一坪、倉庫坪数二七八坪、一二七馬力、帯鋸機四台が活動している。

前工場長村田広吉は大正十三年十一月入社、置戸事業所、落合事業所勤務、昭和十五年五月落合事業所造材主任、二十二年五月落合工場長、二十五年五月取締役工場長に就任し、昭和三十四年五月まで在職している。

落合工場の製材係長は千葉弘で、昭和二十二年五月入社、本社製材課、函館販売所、本社製材課勤務、三十一年五月札幌工場製材、昭和三十三年五月落合工場製材係長となつて現在に及んでいる。

木材の街、落合の中心工場として長い歴史を持つているこの工場は、幾寅営林署から原木の払下げをうけ、年間造材二万石、年間ひきつぶし石数は五万石に及んでい

る。

製材は十勝、岩見沢を中心とした北空知と南空知、本州では東京地方に販売している。時材はなく、ほとんど針葉樹であることも落合の特色である。

歴代工場長は次の通りであつた。

1、安　済　清　八　　大正十五年まで
2、柄　沢　角　治　　昭和十六年まで
3、斎　藤　直　次　　昭和十九年まで
4、加　藤　富士松　　昭和二十一年まで
5、村　田　広　吉　　昭和三十四年まで
6、中　島　光　男　　現在

長年落合のためにつくした村田広吉は、昭和三十四年五月一日以来本社の取締役素材部長として札幌を中心に活動している。

第六節　下金山木工場

昭和五年頃、丹野米橘、桝谷某の共同経営で創立されたのであるが、この時は小規模の経木工場で、製品は小樽におくつていた。

昭和六年十一月、この工場は火災にあつて焼けたので、昭和七年三月七日に再建の上、操業にかかつたのである。

新谷三郎が機械鋸目立のために工場にはいつたのもこの頃であつた。株式会社となつたのは昭和九年九月三日である。

この頃から旭川市の斎藤弥三郎の斎藤木材株式会社の系統会社であつた。斎藤弥三郎は幾寅に牧場を持つていたり、落合で造材している人なので、斎藤の事業について一言すると、旭川を本社とし、北見市、富良野町、遠軽町、一ノ橋、下金山、占冠に工場を持つていた。

旭川の本社の工場はよく判らないが、北見市の工場は昭和三十二年に第二斎藤木材株式会社として東京の弟の経営下に入り、富良野町は昭和三十二年秋田木材に売却遠軽は二十三年に閉鎖、一ノ橋は昭和十三年当時帝室林野局に売却したのである。

さて下金山木工場は、同一営林署内に下金山と占冠と二つの工場があつたので、営林署が同一系統の会社には原木供給の関係上一工場にする様に要望されるところもあつて、結局占冠を残したのである。占冠工場は現斎藤木材唯一の工場である。

株式会社下金山木工場となつたとき、工場長は橘一二であつたが、その後丹野米橘に変つたけれども以上の様